

## 【論文】

# 地理的側面から見る市民マラソン大会 —全国データベースの分析およびランナー調査をもとに—

辻横 真琴

## I はじめに

マラソン文化が根付いている日本において、市民マラソン大会にランナーとして参加したり、沿道で応援したり、テレビで観戦したりといった経験のある人は非常に多いのではないだろうか。現在日本には、2,000から3,000件の市民マラソン大会が存在し<sup>1)</sup>、単純計算で月に200件前後の大会が全国各地で開催されていることになる。

これほど多くの市民マラソン大会が存在する日本では、大会のあり方も多種多様なものとなっている。抽選によって参加の可否が決まる大規模なものや、地域色を全面的に押し出したローカルなもの、練習感覚で気軽に参加できるものなど、全く同じ条件・要素を持った大会は一つとして存在しない。これは、マラソンがきわめて地理的なスポーツであるということの影響も大きいと考えられる。

屋外の道路を走るマラソンは、ランナーの体調だけでなく、天気や気候、地形といった自然条件がパフォーマンスに大きく影響するスポーツである。そして、マラソンの大会が全国各地で開催されており、開催場所と時期によってコース上の景色や高低差、気象条件が異なり、さらには開催地域の歴史的・文化的背景といった目に見えない部分をも含んだ地理的要素と深く関連している。また、大会のコースや規模、コンセプト、参加ランナーにも異なる特徴が現れる。こうしたマラソンの特性に着目し、地理的な側面から市民マラソン大会をとらえようと試みたものが本研究である。

これまで日本では、マラソンを題材としたさまざまな研究が行われてきた。神野・福島(2018)は、富山マラソンを対象に、大会の継続的な参加要因と課題を抽出するとともに、ツーリズムを視野に入れた新たなサービス展開の必要性についても言及した。岩谷ほか(2012)は、日本陸上競技連盟公認コースのフルマラソン大会を対象に、参加者数や女性参加率、制限時間、主催団体について分析し、大会を4グループに分類した上で、その特徴ごとに課題と改善策を提示した。また、二宮ほか(2014)は、京都マラソンの参加者を対象とした大規模調査を実

施することによって大会参加に伴う詳細な消費支出を把握し、都市型市民マラソン大会における経済波及効果を推計した。これらの研究を含め、観光学やスポーツ科学、経済学などの分野を専門としたものが目立つ。

では、地理学の分野ではどうか。スポーツそのものに関する研究は英語圏諸国において蓄積されており、スポーツ地理学の先駆的存在であるアメリカ人地理学者Rooneyは、Pillsburyとの共著*Atlas of American Sport*において、主にアメリカ合衆国でのスポーツ活動の地域差の分析を行った(Rooney and Pillsbury 1992)。また、イギリス人地理学者Baleは、「空間」と「場所」が地理学とスポーツの両方にとって中心的な概念であるとし、その関係性を包括的に説明した(Bale 2002)。こうした業績を受け、近年は他の研究者たちによってより多様な観点からの研究が展開されている。日本においても近年になり和田(2018)が、地理学の観点からスポーツ研究を行う意義・必要性は高まっていると指摘し、今後さらに研究の充実が期待されるテーマや、日本を含めた他の国・地域における地理学的知見からのスポーツ研究の余地についても言及している。

しかし、マラソン競技・マラソン大会を扱った研究は国内外を通してきわめて少ない。スポーツ地理学の研究蓄積がある海外でも研究例が少ない背景には、一つの国のあらゆる地域で、年間数千件の大会が開催されているのは世界の中でも日本だけであり、そもそも海外と日本ではマラソン事情が異なっていることがあるといえるだろう。それでも日本における地理学の専門雑誌に掲載された研究の中で特にマラソンの地理的な特性に着目したものは、別府大分毎日マラソンについて、記録と気象、別府湾沿岸のコースの地形との関係を述べた千田(2000)に限られる。

さらに、日本におけるマラソン大会関連の研究全体を通じて、個々の大会にのみ着目したものが大半を占めており、全国規模でさまざまな大会に着目した研究はほとんど行われていない。そのため、全国の大会を対象としたマラソン研究は前例がなく、これを研究課題として地理学の分野からアプローチすることには大きな意義があ

るといえる。

以上を踏まえ、本研究では、市民マラソン大会の全国規模での分析を試み、その地理的な特徴や傾向を明らかにする。そのために、二つの方法を採用する(詳細はⅡで説明する)。第一に、全国の市民マラソン大会のデータを収集し、作成したデータベースをもとに多様な角度から分析を行う。その結果、全国規模での大会の地理的な傾向を明らかにすることができる。しかし、この分析だけでは、全体を広く浅く掴むことにとどまってしまうだろう。そこで、第二の方法として、複数の大会を対象に、参加ランナーに対するアンケート調査を実施する。これにより、データベースには反映されていない参加ランナーの情報を入手でき、個々の事例を深く掘り下げることが可能となる。そして、それぞれのアンケート結果の比較によって、データベースの分析とは異なるアプローチで大会の傾向や差異を見出す。これら二つの方法を用いてそれぞれの結果を照らし合わせ、総合的に考察を行うことで、より詳細かつ説得力のある結果を提示できると考えた。

## Ⅱ 分析対象と方法

### 1. 分析対象とする市民マラソン大会

全国各地で開催されている市民マラソン大会は、大会規模や開催種目、主催団体等がそれぞれ異なっており、公式な情報を得られない大会も少なくないため、全国のあらゆる大会を完全に把握するのは困難である。そこで、本研究において分析対象とする市民マラソン大会の条件を設定し、それに該当すると判断した大会を扱うこととする。条件は以下の通りである。

第一に、年に1回のみ開催される大会であること。第二に、メインの開催種目が個人の一般市民ランナー向けであること(トレイルラン、ウルトラマラソン、クロスカンントリー、トライアスロン、マラニック、時間制耐久レース、タイムトライアル、駅伝、リレーマラソンをメインの種目としている大会は除く)。以上の項目に該当する大会を、本研究における「市民マラソン大会」とする。

第一の項目については、年に複数回開催される大会を含める場合、全ての大会を把握するのがきわめて難しいことや、調査対象がさらに莫大な数になり扱いきれないことなどを考慮し、年1回開催の大会としている。

第二の項目については、個人の一般市民、特にアマチュアのランナーにとって出場のハードルが高いと考えられる種目や、複数人でなければ出場できない種目がメインの大会を「市民マラソン大会」と一括りにするのは適当ではないと判断し、本研究では除外することとした。

なお、除外対象として挙げた種目を含む大会でも、フルマラソンやハーフマラソンといった一般的な種目がメインの大会は調査対象としている。

### 2. 市民マラソン大会データベースの構築

本研究では、上記の条件に該当し、2019年1月から12月の間に開催された市民マラソン大会(台風などの影響で中止となった大会も含む)802件のデータベースを独自に作成した。作成にあたっては、日本最大級のランニングポータルサイトであるRUNNET<sup>2)</sup>やスポーツイベント検索サイトのSPORTS ENTRY<sup>3)</sup>に掲載された大会の基本情報、およびそれぞれの大会のホームページを主に参照した。

入力項目は、大会名や開催日、開催地、種目、参加定員などの基本情報に加え、参加賞やコース類型、その他特徴(大会ゲストや会場で振舞われる食べ物など)といった個々の大会に関するさまざまな情報を網羅している。なお、不明の項目については空欄とし、データの分析においてはそれらをカウントせずに行っている。データベースへの入力期間は、2019年2月から8月にかけてである。8月末までに大会情報が公開されており、筆者がその情報にアクセスすることのできた大会をデータベースに反映している。

このデータベースをもとに、地方別、都道府県・市町村別や一部の項目における類型別などさまざまな角度からデータを集計することで全国規模での市民マラソン大会の特徴を読み取り、データベースの大会情報とも照らし合わせて分析した。

### 3. ランナーへのアンケート調査

2019年8月から11月の間に開催された国内7大会において、参加ランナーを対象にアンケート調査を実施した(後掲の表2を参照)。7大会の選定基準は、開催地域や大会規模、開催数、コース等の条件や特徴が異なっているものとした(Ⅲの分類に基づく)。

大会当日に会場で参加ランナーに協力を呼びかけ、質問票を配布し記入を依頼、その場で回収する方式をとった。その結果、計330名の参加ランナーから回答の協力を得ることができた。

質問票は全12問で構成されており、居住地や交通手段、滞在期間、大会参加の決め手等、個々のランナーにおける地理的な条件の違いによって回答結果に差が生じると考えられる項目を中心に設けた。

## Ⅲ データベースに基づく市民マラソン大会の全国分析

### 1. 大会分布

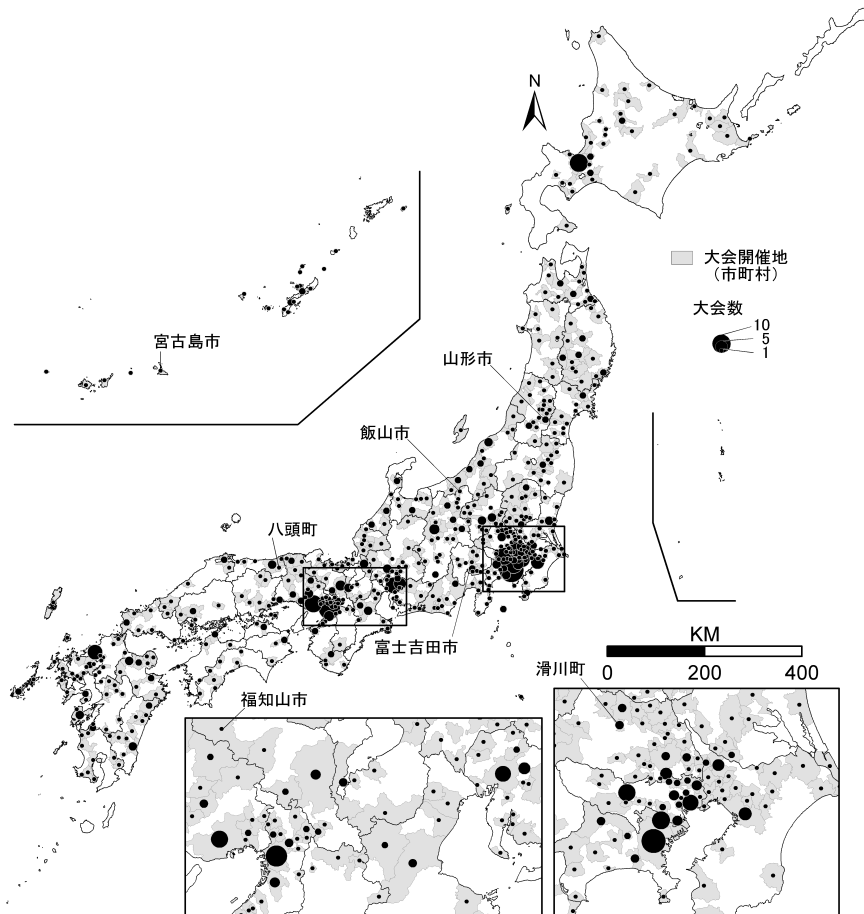


図1 大会分布

(名称を表記した市町は、本研究においてアンケート調査の対象となった大会の開催地である。データベースをもとに作成)

802大会全ての開催地データをもとに、市町村単位で大会開催地の分布を示した(図1)。全体として、大都市圏<sup>4)</sup>とその周辺に大会が集中する傾向にあることが明らかである。大都市圏の中でも特に、関東、中京、近畿の三大都市圏に集中している。このことから、大都市圏とそれ以外に大会分布の特徴が大別できるとし、それらを分けて順に見ていくこととする。

関東地方では、東京都区部を中心に、埼玉県、東京都市部、神奈川県東部および千葉県北西部にかけて集中するかたちで大会が開催されている。圧倒的な人口を抱える関東大都市圏においては、必然的にランニング人口も多いといえ、それだけ多くの大会が集中的に開催されていると考えられる。特に関東大都市圏内の171大会のうち、69大会が中心市(東京都区部、さいたま市、千葉市、横浜市、川崎市)で開催されていることが、データベースから明らかとなった。

中部地方では、中京大都市圏において大会の密集が見られた。際立って多いのは名古屋市で、そこを中心として愛知県西部、岐阜県南部、三重県北部に分布していることがわかる。特に岐阜県は、北部や中部においては大

会が少ない。岐阜県では15大会中9大会が、愛知県では31大会中26大会が中京大都市圏内で開催されている。

近畿地方では、6府県全106大会中79大会が近畿大都市圏内で開催されており、さらに79大会中25大会が中心市での開催となっている。特に大阪市を中心に、神戸市にも分布が集中しているが、関東大都市圏のような集中度合いには及んでいないといえる。これら以外の大都市圏においても、札幌、仙台、北九州・福岡などの周辺で、集中的とまでは言い難いものの大会数が多くなっている。

では、大都市圏以外の地域ではどうか。図1を見ると、北海道では、札幌大都市圏以外においては内陸部や各方位の先端部まで、広く分布していることがわかる。東北地方や北陸地方、山梨県、長野県などでもまんべんなく、多くの市町村で大会が開催されている。また、海沿いに多いといえるのが中国地方の日本海側、中国・四国地方の瀬戸内海沿岸、九州地方や沖縄地方の西日本地域である。離島<sup>5)</sup>においても多くの大会が開催されていることがわかる。

データベースに記載の全ての大会の開催地について、市町村別の分布を地図上に示したことで、大都市圏、特

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	集計
北海道	1	2	0	1	6	10	7	3	11	6	0	1	48
東北	1	1	2	8	12	12	7	7	13	20	8	1	92
関東甲信	31	22	40	18	18	23	4	7	18	29	34	24	268
北陸	1	0	3	8	7	6	2	0	6	9	4	0	46
東海	12	8	6	8	4	2	1	1	1	5	18	8	74
近畿	12	15	16	8	5	7	2	2	3	11	13	12	106
中国	0	4	8	4	3	2	1	0	1	5	5	3	36
四国	0	4	3	1	2	1	1	0	0	5	3	2	22
九州	13	14	25	9	2	3	1	2	1	6	8	7	91
沖縄	3	4	1	2	0	0	0	0	1	2	5	1	19
集計	74	74	104	67	59	66	26	22	55	98	98	59	802

図2 月別大会数 (2019年)

(データベースをもとに作成)

に三大都市圏への大会の集中が見られること、地方においては都道府県全域のさまざまな市町村に分布、また特に西日本では海沿いの地域に比較的多く分布しているというおおまかな傾向が示されたといえる。

## 2. 月別大会数

開催時期による大会数や分布の変化を見るため、月別の大会数を集計したところ、図2のような結果が得られた(データベースと数値によって大会数を表示)。なお、ここでは傾向をわかりやすく示すため、地方別にも集計した。

全国で見ると、特に3月、10月、11月に大会が集中し、7月、8月はきわめて少ない結果となった。これには、気象条件と関連した、マラソンのいわゆる「シーズン」が背景にあると考えられる。例年テレビ中継され多くのアスリートが出場する国内の主要マラソン大会がこぞって開催されている<sup>6)</sup>ことから、マラソンのシーズンとして一般的に定着しているのは、オリンピックや世界陸上を除いて冬(秋から春のはじめにかけて)であることが明らかである。市民マラソン大会においても、この時期に多くの大会が集中している。データベースに基づくと、1年のうちで特に大会が集中しているのは、2019年3月10日(日)に27大会、10月20日(日)と27日(日)にそれぞれ25大会、11月10日(日)に25大会となっている。このような集中期間には、あらゆる地域で大会が開催されているのが確認できることから、どの地域においてもランナーにとって走りやすい気候だといえ、同一日に多くの大会が開催されたとしてもランナーの集客が最も図れる時期であると考えられる。

その一方で、真夏には大会が激減する。マラソンレベ

ルの長距離走には適さない気温であることが最大の理由である。暑さによるリスクがきわめて高いことは容易に想像できるが、その中でも開催されている大会の内訳を見ると、北海道や東北地方など比較的気温の低い地域での開催が多くなっている。種目についても、7月・8月でフルマラソンが実施されているのは函館マラソン、札幌豊平川市民マラソン、北海道マラソンの3大会のみである。それ以外の地域でこの時期に開催されている大会を見ると、早朝、サンセットやナイター、高地で開催されるものなど、暑さに考慮したものも多い。逆に、北海道や東北地方、また北陸地方は、マラソンシーズン本番(特に冬)には気温がかなり低下することに加え雪の影響も大きいため、大会数が減少していると考えられる。四季があり、地域によって気候も異なる日本では、それが大会の開催にも大きく影響しているといえる。

## 3. コース周辺環境・形態別類型化

コースは、市民マラソン大会の持つ要素の中でも特に地理的特徴が現れやすいものであることから、大会ホームページに掲載されているコース図を参考に、コースの周辺環境および形態について類型化した。

まず、コースの周辺環境については、シティロード型、田園・山間型、シーサイド型、河川敷型、湖畔型、パーク型、その他(特殊)の7類型とした。具体的には、コースの主要部分が都市部の大通りや市街地である場合はシティロード型、公園内など限られた敷地内を周回で走る場合はパーク型、というような判断基準を設けている。都道府県別の類型化の結果を図3に示した。

全体の傾向としては、東日本よりも西日本でシーサイド型が目立っている。これは、1でも述べたように、特

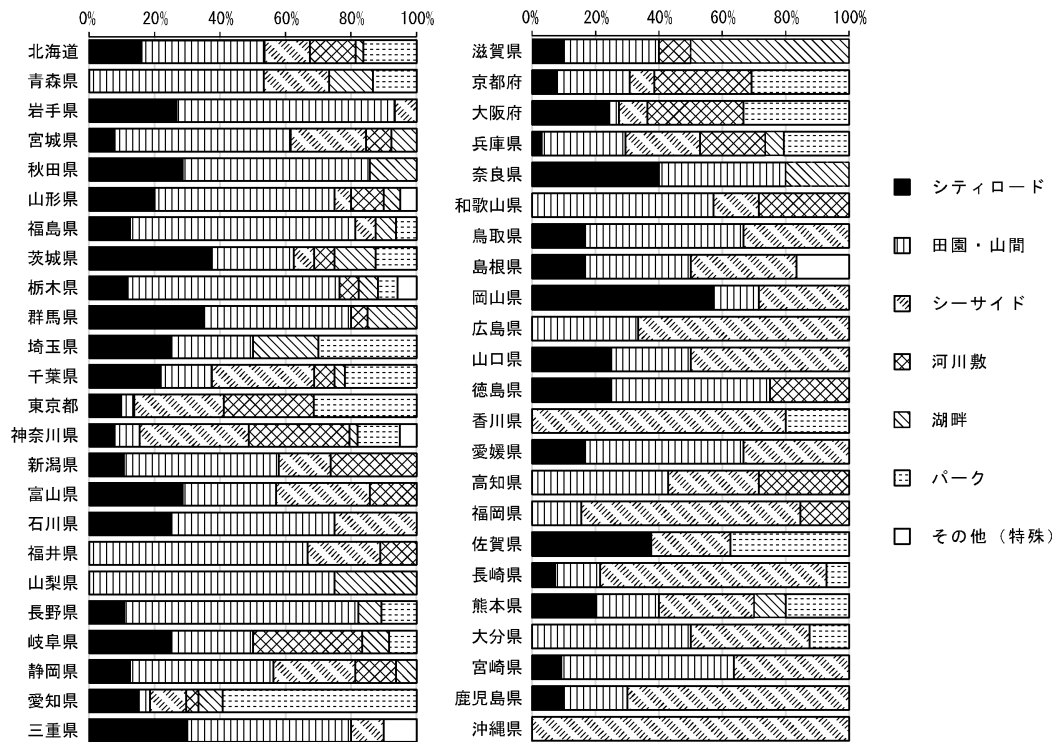


図3 コース周辺環境類型別割合

(データベースをもとに作成)

に西日本では、海沿いの地域で開催される大会が多い傾向にあることや、離島で開催される大会が非常に多いことが理由として挙げられる。特に長崎県や沖縄県で離島での開催が目立ち、沖縄県では分析対象とした大会全てがシーサイド型という結果となった。千葉県、東京都、神奈川県でも多くなっているが、東京湾岸地域に大会が集中しているためである。

一方で東日本では田園・山間型が多くなっており、北海道、東北地方や関東地方の内陸県、山梨県、長野県での大会数が際立っている。その中でも特に山梨県や長野県は、富士山や南アルプス、信州の自然を活かした大会が多いことがデータベースから読み取れる。

また、大きな特徴が見られたのがパーク型で、三大都市圏においてかなりの割合を占めていることが明らかとなった。関東、中部、近畿大都市圏内の288大会のうち、パーク型は77大会と、4分の1以上を占めている。パーク型の大会は、一般道路の大規模な交通規制を要さず、コンパクトな大会運営が可能であるため、大都市でも開催しやすいといえる。河川敷型も同様の理由で、東京都や神奈川県、大阪府において特に開催されていると考えられる。それ以外で河川敷型の割合が高い地域では、大きな河川沿いでの開催が大半を占めており、実際、河川敷型の大会の94%が、一般的には規模が大きい1級河川沿いのコースとなっている<sup>7)</sup>。災害時の被害を軽減させるため、特に規模が大きい1級河川では河川敷も広くと

られており、複数人のランナーが一斉に走れるだけの十分な幅があるといえる。湖畔型は、自然湖のみならず、各地ダム湖周辺においての開催も複数見られる。その中でも特に、滋賀県の琵琶湖や埼玉県の彩湖（調節池）の周辺で開催される大会が多い。

シティロード型は、地方では数は少ないものの、割合で見ると3～5割を占めている県もある。これは、年間大会数は少ないが、4で後述する大規模、メガレバ（都道府県の総力をあげての大会）かつ中心市街地を通る大会が開催されているためである。その他（特殊）に分類した大会は、ごく少数のため分析するには至らなかったが、サーキット場や空港といった普段は走ることのできない場所をコースに取り入れているなど、全国的に見ても大変珍しいものとなっている。

次に、コースの形態について、折返し、周回、ワンウェイの3類型で分類した。コースの形態を判別することのできた672大会のうち、374大会が折返しという結果となった。折返しでなければ走路の確保が難しいという場合もあるが、交通規制の範囲縮小やボランティア人数の縮小など運営そのものの負担削減にも繋がるため、地域に関係なく、多くの大会で折返しのコースが採用されていると考えられる。

また、先述のコース周辺環境と関連深い結果も得られた。特に三大都市圏で周回型の大会が多く、約40%を占めている。これは、パーク型の大会が多いことと関係し

表1 大会規模および開催自治体の人口規模別の大会数

開催自治体の 人口規模	大会規模				集計
	小	中	大	メガ	
大都市 (東京都区 部・政令指定都市)	29	50	23	8	110
中都市① (人口30 万人以上の都市)	7	32	27	3	69
中都市② (人口30 万人未満10万人以上 の都市)	18	57	30	6	111
小都市 (人口10万 人未満の市)	28	106	39	3	176
町村	28	65	12	1	106
集計	110	310	131	21	572

(データベースをもとに作成。自治体規模区分は、総務省の都市規模設定に準ずる)

ているからである。一方、群馬県、山梨県、長野県、滋賀県などはパーク型の大会はほとんど開催されていないものの周回型の大会が約20%から30%を占めており、こちらは湖畔型の大会と関係していることが示された。ワンウェイの大会は多くは開催されておらず、明らかな傾向を見出すのは難しい結果となった。

コースの周辺環境および形態に着目し、類型化を行ったことで、「海」と「山」のどちらを活かした大会が多いかという点で東日本と西日本での大きな違いが見られ、都市部におけるパーク型(周回)・河川敷型大会との関係性なども明らかとなった。

#### 4. 大会規模

開催都市の規模によって異なる傾向が見られるのではないかと予想のもと、大会規模について、参加定員やエントリー数をもとに分類した。1,000人未満を「小規模」、1,000人以上5,000人未満を「中規模」、5,000人以上15,000人未満を「大規模」、15,000人以上を「メガ」とし、大会規模および開催自治体の人口規模別の大会数を表1に示した。

これらのデータが得られた572大会のうち、中規模が310大会となった。全国的に中規模の大会が多く開催されているのは、市民マラソン大会において最もスタンダードかつ、開催地の人口の大小にかかわらず集客が可能な規模であることを示しているといえる。そのため、データベースで内訳を見ても、ローカルな大会から大都市開催の大会までさまざまであった。

大規模の大会は、中規模の半数以下の131大会となるが、もともと人口が多い都市で近隣地域住民を中心に集客が図れる大会と、地方開催で他地域からの集客も図っている大会に二分される傾向が見られる。後者に関してはさらに、中都市開催でメガレベルに近く、比較的新しい大会と、小都市開催で歴史の長い大会が多い傾向にある。

東京マラソンに代表されるメガレベルの大会は、開催都道府県における総力をあげての大会や、大規模大会と同様にかなり歴史の長い大会が多いことが、データベースに記載の大会名や主催・共催団体からも見て取れる。また、メガレベルの21大会のうち、大都市で開催されているのが8大会となっているが、人口約70,000人の総社市<sup>8)</sup>において定員25,000人のそうじゃ吉備路マラソンが開催されているなど、大都市でなければメガレベルの大会は開催できない、というわけではないことも明らかとなった。

小規模の大会(110大会)に関しても、小都市や町村ばかりで開催されているわけではないことがわかる。小都市・町村における小規模大会の割合が約20%であるのに対し、大都市においては約26%となっている。データベースを見ると、地方のきわめてローカルな大会も見られるが、関東大都市圏や名古屋市などでの開催が目立つ。また、3において、コンパクトな大会運営が可能であるため大都市でも開催しやすいと述べたパーク型・河川敷型の大会が小規模大会の約30%を占めており、都市部における小規模大会の多さに納得がいく結果が得られた。ランニング人口が多い都市部では、練習感覚で気軽に参加できる小規模な大会に十分な需要があり、運営も理にかなったものであることから、いくつも開催されやすいと考えられる。

以上により、開催地の人口規模と大会規模は直接結びついてはいないことが明らかとなった。都市部と地方では大会の性質やその需要は異なっており、小規模の大会はむしろ都市部で比較的多く開催され、メガレベルの大会でも地方の小都市で開催されているなど、予想に反した結果となった。

#### IV ランナー調査の結果から見る大会ごとの特徴

ここからは、国内7大会(表2)において、参加ランナーを対象に実施したアンケート調査の結果を見ていく。なお、以下では大会名称を丸数字と開催県名および市町名の組合せで略称として示すことにした(ただし、山形県山形市で開催された第7回山形まるごとマラソンに関しては「④山形」とした)。

##### 1. 居住地

各大会のおおよその集客圏を明らかにするため、参加ランナー自身の居住地について問うた。

特に居住地の分布が広範囲だったのは、⑥沖縄宮古島と⑦京都福知山である。前者の大会は、市内や沖縄本島、県内の離島からの参加のほか、関東地方や近畿地方、

表2 アンケート調査実施大会概要およびアンケート結果の一部

開催日	大会名 (開催地)	大会規模 コース分類	ランナーの居住地 (上位県)	交通手段 (上位項目)	大会参加の決め手 (上位項目)
2019年8月25日(日)	第39回山日YBS富士吉田火祭りロードレース(①山梨富士吉田)	中規模(3,800人) 田園・山間型,折返し	神奈川県28%,東京25%,静岡23%,山梨・長野・千葉各6%,その他6%	車56%,バス22%,電車12%	コース設定27%,開催時期24%,おもてなし15%
2019年9月7日(土)	森林公園deランニングフェスタ2019(②埼玉滑川)	小規模(500人) パーク型,周回	埼玉58%,東京25%,茨城7%,千葉4%,群馬4%,神奈川2%	車70%,電車16%,バス・自転車各4%	アクセス25%,開催時期23%,コース設定・種目各16%
2019年9月22日(日)	第7回北信州ハーフマラソン(③長野飯山)	中規模(2,700人) 田園・山間型,折返し	長野66%,新潟8%,石川・群馬・千葉・愛知各4%,その他10%	車75%,電車9%,新幹線8%	開催時期20%,おもてなし19%,コース設定18%
2019年10月6日(日)	第7回山形まるごとマラソン(④山形)	大規模(5,000人) シティロード型,折返し	山形50%,宮城26%,栃木6%,群馬・千葉各4%,その他10%	車70%,バス11%,新幹線9%	開催時期25%,おもてなし22%,コース設定18%
2019年10月14日(月・祝)	第14回森下広一杯八頭町マラソン(⑤鳥取八頭)	中規模(1,200人) 田園・山間型,折返し	鳥取62%,岡山12%,兵庫10%,大阪6%,島根・京都各4%,広島2%	車78%,バス12%,電車4%	開催時期22%,アクセス17%,参加費12%
2019年11月3日(日・祝)	第10回エコアイランド宮古島マラソン(⑥沖縄宮古島)	中規模(2,100人) シーサイド型,折返し	沖縄26%,神奈川12%,埼玉・京都各10%,兵庫8%,大阪・三重各6%,東京・愛知・福岡各4%,その他10%	飛行機38%,車25%,バス19%	開催時期・観光スポット各20%,コース設定19%,おもてなし11%
2019年11月23日(土・祝)	第29回福知山マラソン(⑦京都福知山)	大規模(9,500人) 田園・山間型,折返し	兵庫30%,大阪22%,京都20%,愛知6%,東京・広島各4%,その他14%	車54%,バス26%,電車11%	開催時期27%,アクセス18%,おもてなし12%

(データベースおよびアンケート結果をもとに作成)

東海地方からも参加が目立つ。この分布の傾向については、次節の内容と合わせて述べる。後者の⑦京都福知山は、近隣府県のほか、関東地方や中国地方、東海地方からの参加が多い。1万人レベルの大規模かつ日本陸上競技連盟の公認大会であるため、認知度が高く、より広範囲からの集客が可能であったと予想できる。

一方で、居住地の分布が比較的狭いのは、②埼玉滑川と⑤鳥取八頭である。特に前者の大会は、エントリー数が約500人と7大会の中では最も小規模であり、子どもやファミリー向けの種目が豊富に設定されているなど、近隣の地域住民が参加することを前提とした大会であることがうかがえる。そのため、埼玉県内からの参加者が半数以上を占め、それ以外も関東地方に収まっているという結果となった。また、⑤鳥取八頭については、鳥取県東部の八頭町ののどかな山間地域で開催され、地元の小学校が大会会場となっているなど地域密着型の非常にローカルな大会であることから、②埼玉滑川と同様に、地域住民の参加をはじめ、近隣府県を中心とした集客圏になっているといえる。

①山梨富士吉田と③長野飯山は隣接県どうしであるが、少し異なる傾向が見られた。前者の大会は関東地方や東海地方の近隣県(特に山梨県からみて南側)からの参加が中心だが、後者では県内のほかに北陸地方や関東地方北部が中心で、特に県内ではその北部から参加しているランナーが多い。これらには、それぞれの開催地の立地が少なからず関係しているといえるだろう。

④山形は、東北地方を中心に、関東(特に北関東)地

方から参加しているランナーも多いことが明らかとなった。東北地方の中では、特に宮城県からの参加が目立つ。開催地の山形市は内陸部に位置しており、山形県内では最も宮城県の最大都市である仙台市と近いため、山形県内のランナーに次いで多くの宮城県のランナーが参加したと考えられる。

このように、各大会の参加ランナーの居住地を調査したことで、開催地や大会の規模・性質によって異なる傾向が見られることが明らかとなった。

## 2. 交通手段

自宅から大会会場に来るまでの間に使用した全ての交通手段を選択式で問うた。

⑥沖縄宮古島を除く6大会で、車(自家用車)が50%を超える結果となり、車で移動可能な距離であれば自ら運転して会場に向かう選択をするランナーが多い傾向にあることが明らかとなった。開催府県内に限らず、それ以外の地域からの参加者も、車の使用割合が高い。今回調査した大会において駐車場の存在を事前に知らせている事例が多かったということもあるが、車であれば荷物を置いておくことができたり、行き帰りの途中で気軽に寄り道ができたりと、ランナーの自由がきくことも大きいだろう。また、これら6大会においては、車に次いで電車やバス、新幹線の割合が高くなっている。②埼玉滑川以外で大会シャトルバスが運行されていたり、⑦京都福知山では臨時列車「福知山マラソン号」が増便されたりと、大会側が参加ランナーのための交通手段を用意し

ていたため、それらを利用したランナーも多くいたと考えられる。

調査対象とした大会のうち、⑥沖縄宮古島のみが離島で開催された大会だが、島外からの移動手段は限られており、飛行機が40%近くを占める結果となった。1において、市内や沖縄本島、県内の離島からの参加のほか、関東や近畿、東海地方からも参加が目立つと述べたが、この分布は、宮古島（宮古空港もしくは下地島空港<sup>9)</sup>への直行便を運航している空港（2019年12月現在、沖縄県内（那覇や離島の空港）以外では羽田、成田、中部国際、関西国際）に近い地域とほとんど一致していることが明らかとなった。

以上により、⑥沖縄宮古島以外では、車で参加したランナーが最も多かったことから、1で得られた居住地（集客圏）に関しての結果は、公共交通機関でのアクセスの利便性に大きく影響を受けたものではないということが示されたといえる。一方で、離島開催の⑥沖縄宮古島では他の地域から参加するには交通手段が飛行機に限定されることから、特に空港に近い地域からの参加が目立つという結果となった。

### 3. 滞在期間および大会参加以外の目的

大会参加にあたっての開催地での滞在期間および大会参加以外に観光などの目的があるかどうかを問うた。目的がある場合には、その内容を記入してもらう欄を設けた。

①山梨富士吉田、③長野飯山、④山形、⑦京都福知山においては70%前後が、②埼玉滑川と⑤鳥取八頭においては90%以上が日帰りという結果となった。また、前者4大会では、大会参加以外の目的があると答えたランナーは40%から50%前後であり、日帰りで大会参加のついでに道の駅や近場の観光地に寄ったり、1泊以上して少し遠出をしたりといった大きく二つの傾向が見られた。後者2大会では、約30%のランナーが大会参加以外の目的があると回答しているが、そのほとんどが日帰りで参加であり、温泉に行くという記述が多くあった。

そしてここでも、全く異なる傾向を示したのは⑥沖縄宮古島で、2泊以上が80%を占め、最長は7泊であった。約70%のランナーが大会参加以外の目的があると回答し、その記述を見てもシュノーケリングや島内ドライブなど、少なからず大会参加以外の目的も携えて足を運んでいるということが明らかとなった。特別な理由もなく簡単に訪れることのできる場所ではないものの、マラソン大会をきっかけに「島に行くための理由」ができたとも考えることもできる。

ランナーの滞在期間および大会参加以外の目的について比較したことで、その長さや目的の内容にはっきりと異なる傾向が見られることが明らかとなった。

### 4. 大会参加の決め手（魅力に感じる要素）

各大会の参加ランナーに対して、その大会への参加の決め手になった要素（魅力に感じる要素）を問うた。この質問は、9項目（開催時期、アクセス、コース設定、種目、参加費、おもてなし、参加賞、観光スポット、その他）からの選択式とした。ただし大会によっては、「大会ゲスト」の項目を追加した10項目となっている。

集計の結果、回答は比較的分散する傾向が見られ、いずれの大会でも30%を超える回答を得た項目は見られなかった。その中で全ての大会において回答割合が高かったのは「開催時期」であった。Ⅲの2でもマラソンのシーズンについて述べたが、③長野飯山から⑦京都福知山までの大会は暑さが和らいでくる時期に開催されており、開催の時期が参加の理由の一つとして多く挙げられたと考えられる。特に10月・11月は大会数が多い分、参加の選択肢も増えるため、その点でも時期的に参加しやすいということがいえるだろう。基本的に市民マラソン大会は休日に開催され、大会情報も数か月前には公開されている。ゆえに、個人的に都合がつくかどうかという意味での開催時期を重視して参加を決めているランナーは少ないはずである。

「コース設定」と「おもてなし」は、それぞれ五つの大会で上位の回答になっている。「コース設定」が1位となった大会は①山梨富士吉田のみである。アップダウンが激しいながらも富士山を眺望できるコースであることが、この大会がランナーを惹きつける理由の一つになっているといえる。ほかの4大会における回答割合は10%台の後半であり、そもそも全体的に回答が分散傾向にあることを考慮すれば、「コース設定」を重視しているランナーは必ずしも少ないとはいえないであろう。「おもてなし」に関しては、特に③長野飯山と④山形で回答割合が高くなっており、ランナーにとって魅力を感じるポイントとなっている。実際、③長野飯山では会場内で「信越自然郷うまいもの市」が開催され、走った後に長野名物を含めたさまざまな食を楽しむことができるようになっていた。④山形では盛大に振舞われた芋煮を食べるランナーで会場は賑わいを見せていた。

その他の項目に関しては、それぞれの大会で特徴的な傾向が見られた。「参加費」の回答割合は、7大会の中で⑤鳥取八頭のみにおいて上位になった。参加費は2,000円であり、この大会と同様にハーフマラソンをメインと



する大会への参加費の相場が3,000円から5,000円（データベースを参照）であることを考慮すると、手頃な価格設定だといえる。「アクセス」が上位となった大会は、②埼玉滑川、⑤鳥取八頭、⑦京都福知山であった。特に②埼玉滑川と⑤鳥取八頭は、7大会の中では集客圏が比較的狭小だったことがこの結果に繋がったと考えられる。一方、集客圏の広い⑦京都福知山でも「アクセス」の回答割合が高くなったのは、臨時列車を出すことによって会場へのアクセスの利便性を高めたことが影響しているといえる。また、開催地周辺の「観光スポット」に関しては、⑥沖縄宮古島のみ上位の回答となった。大会への参加だけでなく、宮古島観光を楽しむことも重視されているのがわかる。それは、3における滞在期間の長さや大会参加以外の目的からも明らかである。

以上から、大会そのものの要素だけでなく、時期やアクセス、観光スポットといった大会を取り巻く外的な要素が、大会参加を決定する際の判断材料の一つとなっていることが明らかとなった。

## V 考察

市民マラソン大会は、さまざまな地理的要素と深く関連しており、特に開催時期と場所、つまり「いつ、どこで」開催されるのかという点において大きな違いが生じていた。ここでは、Ⅲのデータ分析およびⅣのアンケート調査の結果を受け、「いつ、どこで」という観点のもと、明らかになった点を整理し考察を加える。

まず、「いつ」、すなわち開催時期についてである。データ分析においては、月毎の大会数の変動が、気温やマラソンのシーズンに関連していることを示した。また、アンケート調査においては、参加の決め手として「開催時期」を挙げているランナーが最も多いという結果が得られた。これら二つの結果は、屋外を走るマラソンにおいて、大会の開催時期が特に気温といった自然条件に大きく左右されるものであり、自らが走るランナーにとっては直接影響を受ける、大会参加の際の重要な検討材料であることを示したといえる。

次に、「どこで」、すなわち開催場所やコースについては、データ分析において都市部（特に大都市）と地方との大会の分布および大会そのものの性質の差、また、コースに着目した際の海や山といった自然条件の違いによる大会の地域差が明らかとなった。一方、アンケート調査では、大会によって、集客圏や交通手段など、複数の項目において異なる傾向が見られた。大会参加の決め手を問うた項目では、先述の「開催時期」ほどではないものの、自宅から開催地までの「アクセス」やどのような

場所を走るのかといった「コース設定」もある程度重視されていることがわかる結果となった。しかし、⑥沖縄宮古島のように「アクセス」についてはほとんど重視されていない大会もあることから、家からの近さや交通の便のよさにかかわらず、その場所に行く大きな目的としてマラソンが作用しているということも考えられるだろう。

このように、いつ、どこで開催されるのかという地理的な要因によって、大会のあり方、内容、またその需要にも違いが生じ、ランナー自身の大会参加における意思決定や目的、行動範囲も変わってくるのである。開催地域をはじめ、さまざまな要素において特徴の異なる大会でアンケート調査を実施したことにより、その傾向や大会ごとの共通点・相違点において、データベースをもとにした分析と関連付けられる結果が得られた。市民マラソン大会が、地理的な側面において非常に深く複雑な要素を持ったものであることが示されたといえる。

## VI おわりに

本研究では、マラソンがきわめて地理的なスポーツであることに着目し、全国802件の市民マラソン大会データおよび7大会330名の参加ランナーに対するアンケート調査の結果を分析することにより、市民マラソン大会の地理的な特徴や傾向をとらえることを試みた。

全国の大会分析においては、独自に作成したデータベースをもとに、多様な角度から分析を行った。その結果、大都市圏に大会が集中する傾向があることや、大会の開催時期や種目が気温に大きく影響を受けていること、また、地域によってコースの周辺環境や形態に異なる特徴が現れることなどが明らかとなった。さらに、アンケート調査では、データベースの分析だけでは得られないランナーの情報をもとに分析を行った。各大会のアンケート結果を比較すると、ランナーの居住地や大会参加にあたっての交通手段、滞在期間など複数の項目で異なる傾向が見られた。この結果には、大会規模やコースといった大会そのものの要素だけでなく、自然条件や開催地域の持つ魅力など、大会を取り巻くさまざまな条件が影響している。本研究で示された全国の市民マラソン大会の地理的な特徴や傾向は、従来の個々の市民マラソン大会にのみ着目した研究からは明らかにならなかったことである。

なお、本研究には、いくつかの限界もある。データベースの分析に関しては、情報収集や作業上の制約からくる精度の限界もある。たとえば、コースの高低差やランナーに提供される「ご当地」の食などについての分析も

試みたが、十分なデータを入手することができなかったため断念した。アンケート調査に関しては、各大会の全ての参加ランナーを対象としたわけではないため、代表性の担保に関しては限界があったといえる。また、都合上8月から11月にかけての調査となり、時期的にも偏りがあった。十分な時間をかけてより精度の高い大会情報を収集し、多くの大会でアンケート調査を実施すること、そしてより多角的な分析を行う必要がある。残された課題は多いといえる。

地理的な側面から市民マラソン大会を掘り下げた本研究が一つのきっかけとなり、市民マラソン大会に対する新たな視点や発見が生じ、これまでとは違った面白さを見出してもらうことができれば幸いである。

謝辞 アンケート調査に快くご協力くださった総勢330名の全国のランナーの皆様、本調査へのご理解をいただき、親身になってご協力くださった調査対象大会の主催団体の皆様をはじめ、調査地でお世話になった全ての方々に心より感謝申し上げます。また、これまで多くの意見をくれたゼミ生の皆、そして、本研究の実施にあたりご指導いただいた宮澤仁先生に深く感謝の意を表す。

## 注

- 1) 公益財団法人日本陸上競技連盟の「JAAF RunLink」による。  
<https://www.jaaf-runlink.jp/about.html> (最終閲覧日:2019年12月15日)
- 2) 株式会社アールビーズ「RUNNET 日本最大級!走る仲間のランニングポータル」による。<https://runnet.jp/> (最終閲覧日:2019年12月13日)
- 3) 株式会社アブロード「マラソン・ランニングのカレンダー」  
<https://www.sportsentry.ne.jp/events/calendar/?category=running&y=2019&m=all> (最終閲覧日:2019年12月15日)
- 4) 本研究における「大都市圏」は、総務省統計局の「大都市圏・都市圏地域図(平成27年国勢調査)」で示された範囲を指している。

- 5) 本研究における「離島」は、北海道、本州、四国、九州、沖縄本島以外の島を指している。
- 6) さいたま国際(12月)、大阪国際女子(1月)、別府大分毎日(2月)、東京、びわ湖毎日(3月)などがその例である。
- 7) データベースから「河川敷型」の大会(河川名および河川レベルも表記している)を抽出し、1級河川の割合を算出した。
- 8) 総社市ホームページ「総社市の人口」を参照した。  
<http://www.city.soja.okayama.jp/shimin/sisei/chikujinkou/jinkou.html> (最終閲覧日:2019年12月14日)
- 9) 宮古島の北西部に位置する下地島にある空港。下地島から宮古島へは、隣接する伊良部島および伊良部大橋を経由して渡ることができる。

## 文献

- 岩谷雄介・鈴木直樹・原 章展・平田竹男 2012. 国内市民マラソン大会の類型別発展策に関する研究. スポーツ産業学研究 22(1): 63-70.
- 神野賢治・福島洋樹 2018. 大規模市民マラソンへの継続的な参加要因の検討—スポーツツーリズムの推進を視座に. 富山大学人間発達科学部紀要 12(2): 63-74.
- 千田 昇 2000. 別府大分毎日マラソンと地形—別府湾沿岸の地形の特徴. 地理 45(7): 34-41.
- 二宮浩彰・松永敬子・長積 仁 2014. 都市型市民マラソンの参加者がもたらす経済波及効果の推計—京都マラソン2012ランナー調査に基づいた分析. 生涯スポーツ学研究 10(1・2): 31-40.
- 和田 崇 2018. 英語圏諸国におけるスポーツ地理学の研究動向. 日本地理学会発表要旨集 94: 53.
- Bale, J. 2002. *Sports Geography*, 2nd ed. London: Routledge.
- Rooney, J. F. and Pillsbury, R. 1992. *Atlas of American Sport*. New York: Macmillan Publishing Company.

---

つじよこ・まこと  
株式会社ゼンリン

## Geographical Perspective of a Japanese Marathon Event: Analyses of a National Database and Runner Survey

TSUJIYOKO Makoto (ZENRIN CO., LTD.)